

浸透する西洋スタイル ～大正期のモダンな住まいと暮らし～

文化のみち二葉館 Kawakami Sadayakko\_House  
名古屋市旧川上貞奴邸  
名古屋市中区

1920(大正9)年、名古屋市中二葉町に赤瓦葺きのマンサード風屋根が異彩を放つ「川上貞奴邸」が竣工しました。日本で最も早く創業した洋風住宅専門会社の一つ「あめりか屋」が設計・施工したもので、日本初の女優・川上貞奴と木曾川の水力発電所建設に尽力した福沢桃介の邸宅です。政財界人のサロンともなった豪華な邸宅は洋館後部に和風の館をつないだ斬新な形で、近代化する住宅の一時期の姿が見られました。



3 4本柱の車寄せや、扇垂木形式の円すい屋根が目を引く正面玄関。2階外壁は色モルタルを掃き付けたドイツ壁。マンサードと切妻を組み合わせたユニークな屋根。マンサード屋根は、多様な様式の屋根、壁を組み合わせた装飾性の高さの特徴がある。大正9年頃の外観写真による推定復元  
4 マンサードと切妻を組み合わせたユニークな屋根。マンサード屋根は、当時のあめりか屋軽井沢出張所の建物にも用いられた



5 2人がプライベートな時を過ごした和室。左の建具を開けると洋風の廊下に出る



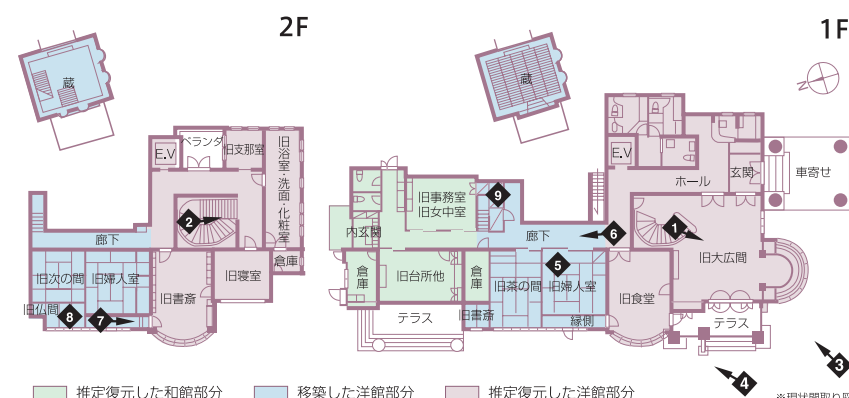
6 洋館から和館へ延びる廊下。左は和室だが、建具の廊下側を洋風にすることでデザインの調和を図っている  
7 この外観は洋風であるため、窓と和室の間に縁側を設けて緩衝帯とし、双方の趣が生きるように工夫した。奥に洋風の書斎が見える



8 創建当初の姿を残す2階仏間。網代天井は屋久島から取り寄せた屋久杉で作られた  
9 創建当初の配電盤。自家発電装置も備えていた貞奴邸は停電知らずだったという



10 大広間は華やかな社交場だった。あめりか屋が同時代に建てた住宅などを参考に復元。スタンドグラスや半円形ソファ、寄木張り床の一部に創建時の部材を使用



川上邸は1938(昭和13)年の改築で洋館が撤去されるなど、創建当初とは姿を変えてきました。このため、創建時の写真や資料、関係者の証言を基に、残された部材を最大限活用して、2005(平成17)年、「文化のみち二葉館 名古屋市旧川上貞奴邸」として現在地に移築・復元されました。

11 2らせん階段は現状より急勾配で、幅も狭かったが、現行法規に適合する形状とした

明治中期頃まで、洋館は独立して建てられ、旧来の日本家屋と渡り廊下で結ばれる様式が主流でした。これに対し、川上邸は2階建ての洋館と、黒瓦葺き屋根に下見板張りの外壁を持つ平屋の和館が連結しているのが特徴です。大正期以降には、独立した洋館の中に和洋室が混在する建て方が現れてくることから、川上邸は2つの様式の中間期に位置するものと考えられます。

邸宅の住人、福沢桃介は電力王と称された人物。桃介は名古屋に拠点を構える必要があり、事業のパートナーとして貞奴を呼び寄せたともいわれています。貞奴は伊藤博文などにひいきにされた元芸者で、女優第一号としても有名であったため、社交・接客役を務めました。  
小高い丘に建つ邸宅には電灯がこうこうと輝き、電動の噴水がある庭園をサーチライトが照らしました。電灯が一家に一灯だった時代に、先進の電化住宅でもあったのです。連日、洋館で催されるパーティに集う人々はスタンドグラスや、らせん階段に魅了されたことでしょう。洋式の食堂で

食事も供され、華やかな宴が繰り広げられました。  
一方、和館には畳敷きの婦人室や茶の間などがしつらえられており、貞奴が親しい友人を迎えたのはこちらでした。社交の場だった洋館に対し、和館は2人が普段の暮らしを営む場所でした。  
あめりか屋は、洋風住宅専門会社のさきがけとして、日本の住宅に新風を吹き込みました。和洋の建築様式は住宅近代化の途上で次第に融合し、それとともに公的、私的な営みが住宅内で共存するようになります。川上邸はそうした変遷の一時期を現代に伝える貴重な建築物です。

■開館時間：午前10時～午後5時  
■休館日：月曜日(祝日の場合はその翌日) 12月29日～1月3日  
■入館料：大人200円(団体160円)  
詳しくはホームページへ  
<http://www.futabakan.city.nagoya.jp/>